

「底が突き抜けた」時代の歩き方 439

「生き生きとしたすごくいい顔してるね」－アブグレイブ刑務所拷問事件

59年暮れから開始された北朝鮮の帰還事業は、日本に在留する同胞を「地上の楽園」という美名で欺いて、共和国に呼び寄せるための国家的な謀略と捉えれば、人間や歴史の闇の真の恐ろしさが覆い隠されてしまうだろう。帰還事業と並行する時期に「永遠なる人民の楽園」、「みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会」の建設を目指す主体思想が形成されつつあったことに注目するなら、主体思想の実践哲学の一環として帰還事業が推進されたと考えられ、「地上の楽園」を一緒に建設するための帰還事業という理想が、現実の中で地獄的な様相を伴って彎曲していくことの恐ろしさとして凝視しなければ、我々はいつまでたっても理想の中に含まれる手酷いしっぺい返しから逃れられないだろう。

イラクを先制攻撃して泥沼状態に陥っている現行のアメリカについても、同じことがいえるかもしれない。フセイン政権の圧政からイラク国民を解放して、イラクの地に「自由と民主主義」をもたらすというアメリカの意図は、北朝鮮の帰還事業がそうであったように、けっして偽りの看板ではなかった。「米国」流の解放であれ、「米国」流の「自由と民主主義」であれ、当然アメリカの国益に即していたとしても、アメリカがフセイン体制からの解放と「自由と民主主義」をイラクに移植しようとする善意は疑えなかった。このアメリカの善意や理想を疑って退けてしまうなら、問題の真の恐ろしさはみえてこない。アメリカの善意や理想がイラクに解放でも「自由と民主主義」でもなく、地獄をもたらしていることを覗き込むことによってこそ、人間の愚かさや歴史の恐ろしさの前に我々は佇み、真剣に考えつづけなくてはならないのを何度も感じる。

アブグレイブ刑務所拷問事件は、まさにアメリカの善意と理想によって惹き起こされた地獄の様相の一つにほかならない。この事件の報道については、まず我々の視線を引き付けたのは、何枚かの写真である。それぞれの写真には次のキャプション（説明文）が付けられている。

「頭巾を被せたイラク人捕虜をモノのように積み上げ、ニッコリとポーズをとる男女の米兵」

「捕虜の両手を頭上に上げさせ、ムキ出しになった男性器を指差してからかう女性兵士」
「ハダカにした捕虜に頭巾だけ被せ、"人間ピラミッド"を作らせる。隠惨極まりない光景だ」

「(先の)女性兵士が、今度は、くわえタバコで性器を指差し、捕虜たちをさんざん笑いものにする」

「黒い頭巾と布を被せ、両手に針金をつないで、『箱から落ちると感電するぞ』と脅す」

「地べたにハダカで座らせた捕虜二人の背中に、さらに別の捕虜を座らせ、性的虐待を加える」

これらのキャプションから多くの人は、かつて自分たちが見たことのある写真を記憶の中から引き出し、キャプションに合わせた記憶の映像を思い浮かべるだろうが、これらの写真は昨年11～12月頃、バグダッド郊外のアブグレイブ刑務所で撮影されたという。私はいま、これらの写真がグラビアで掲載されている週刊誌を見ながら書き進めているが、初めて見たときの感想は凄惨な拷問写真である筈なのに、嬉々とした女性兵士（たち）の実に「いい表情」に見とれていたということに尽きる。その感想はいまも変わらない。捕虜の男性器を指差している女性兵士も「いい表情」だが、中でも「頭巾を被せたイラク人捕虜をモノのように積み上げ、ニッコリとポーズをとる男女の米兵」を映し出す写真の中央で満面に笑みを湛える若い女性兵士の映像は、「実にいい表情」なのである（後に、同一人物であることが判明）。

もちろん、彼女たちの「生き生きとしたすごくいい顔」は、よくある自然の風景の中で引き出されたものでもないし、若い女性が恋人に対してみせる輝かしい表情といった背景とも異なる。紛れもなく刑務所の中の顔の見えない捕虜たちが拷問されている光景の中で、際立って浮かび上がってきたものである。おぞましく忌まわしい拷問写真に嫌気を催さずに、拷問している側の若い女性の表情に気を取られるというのは、不謹慎だろうか。その女性の表情に邪悪さを見出さずに、「生き生きとしたすごくいい顔」を感じるのとは、どこかヘンなのだろうか。それとも、どのようなものが映っていようと、拷問写真に我々は怒り、悲しみ、無力感を漂わせなくてはならないのだろうか。拷問にも拷問写真にも我々はいまやなんの衝撃も感じなくなってしまうているが、拷問を楽しんでいる兵士たちが映しだされる中で、若い女性兵士が「生き生きとしたすごくいい顔してる」ということは、人間というものを考える上で、非常に衝撃的なことではないのだろうか。

私のように感じたことを率直に口に出すことはどこかためられるのか、似た感想はあまり見かけなかったが、全く出会わないわけではなかった。ジャーナリストの田中宇、常岡浩介、武田徹の三人が『SPA!』（04. 5. 25）で、「イラク人虐待写真」について自在に語り合っている。

田中 まず目につくのは、虐待している兵士が仲間内の罰ゲームのようにくつろいでいることですね。

常岡 この女性も、生き生きとしたすごくいい顔してますもんね。

武田 変な言い方だけど、一種の記念撮影だったんじゃないか。日本のストリート系ギャル雑誌なんかのポーズ写真と近い印象がある。もちろん虐待する記念写真ってのはそれだけでもかなり異常なシチュエーションだけど。

田中 上官から命じられてなければ、もっとコソコソやりますよ。こんなに当然のようにはできないでしょう。しかもわざわざ写真を撮ったということは、内部の業務報告に使わ

れた可能性がある。

常岡（略）しかし、どうして今さら騒ぐのか。収容所で暴行や性的虐待が行われているのは占領が始まった当初からあるのに。

更に、この座談で印象に残った発言を取り上げると、「アラブ系メディアでは、この件はどう報道されたの」と訊かれて、「あまり大きく扱っていないようです。アルジャジーラはトップ扱いだったけど、内容は米国で報道されたものそのまま。それよりも、ファルージャ攻撃の話が出たときのほうがアラブ世界の衝撃は大きかった。アラブの報道では米軍に殺された子供や女性の遺体が連日出ています。イラク人にしてみれば、米軍侵攻以来、虐待の連続なんです。殺されている現実と比べれば、刑務所での虐待写真なんて別に驚くことではなかった。でも、米国や日本の大手メディアは今まで報じてこなかった。だからこれだけショックが広がったんだろうと思います。」（常岡）また、「情報そのものよりも、それを誰が、どのタイミングで流しているかに大きな意味がある」（田中）として、虐待写真の流出そのものの情報操作の可能性について言及されているが、最後は次のような発言で締め括られている。

「インターネットによって情報量は膨大になっているし、誰でも簡単に情報を流せる時代になって、異論反論も錯綜し、みんな何を信頼していいかわからなくなっている。そういう情報環境だからこそ、いい意味でのメディアリテラシーが必要になる。確かに信じられる領域や、たぶんこういう可能性もあると予測できる領域を改めて確保し、それを少しずつ増やしていく必要があるんだと思う。そのためにも、アラブだとかアングロサクソンだとかを超えた視点で、まず「人間とは何か」を考えることから始めないと。」

朝日新聞ヨーロッパ総局長の外岡秀俊も『論座』（04. 7）で、『R 2 I』米収容所群島の深い闇」と題して冒頭からこう書き出している。

《多くのコラムニストが指摘したように、米CBSテレビが4月末に放映した虐待写真の不気味さは、残虐を前に無邪気に振る舞う若い女性兵士の笑顔に起因している。残虐な映像は普通、恐怖か怒りの感情を呼び起こす。だが一連の写真がかき立てるのは、他人の痛覚から遮断され、自らが犯した行為に対する罪の意識を完全に抹消した人間のおぞましさだ。この写真報道だけなら、起訴された7人の憲兵にサディストの汚名を着せて問題を葬ることもできたらう。だがその直後に米誌ニューヨーカーが二度にわたって掲載した調査報道が、流れを変えた。レポートは、無邪気な女性兵士の笑顔の裏に、構造的な虐待の慣行があったことを明らかにした。兵士が笑っているのは、虐待を奨励され、任務を遂行していると信じ込んでいたからかもしれない。》

女性兵士の無邪気な笑顔については、ジャーナリストの青木富貴子が、写真流出の三日後に週刊誌『ニューヨーカー』に「アブグレイブの拷問」という記事を掲載した元ニューヨーク・タイムズ記者のピューリッツァー賞記者セイモア・ハーシュに独占インタビュー（『文藝春秋』04. 7）を行いながら、『全裸の男性を積み上げた人間ピラミッド、女性の下着

を頭にかぶせられた裸の収容者、これを見てにこにこポーズを取る男女米兵の姿など、一連の写真は一体何を意味し、何を象徴するのだろうか。”米軍の墮落”としか呼びようもない写真を前に、市民はただ呆然とするばかりだった》と報道し、次のように書き進める。

《アブグレイブ刑務所における捕虜虐待の罪で訴追された7名の男女憲兵は、第372憲兵中隊所属で全員が予備役兵。ウエスト・ヴァージニアやペンシルベニア州など片田舎の出身者が多い。

特に目を引くのはイラク人男性の収容者に首ひもをつけ、飼い犬のように引っ張っている女性兵士の写真である。この21歳のリンディー・イングランド上等兵はさながら虐待する側を代表するこの事件の象徴になってしまった。

煙草を吸いながら収容者の股間を指差してるのもこのイングランド上等兵。別の写真では、この酷い環境で恋人同士になったチャールズ・グレーナー伍長と屈託もなく微笑んでいる。彼らは、何故、にこにこポーズしているのだろうか。

「彼らが何を考えていたか、私にはわからない。とはいえ、いろいろな人から話を聞いたところ、彼らが写真でポーズしたのは、イスラム人を辱めるためだったというのだ。イスラム社会では、男性が裸にされるといのは、とてもとても耐え難いことなのだ。コーランにも逆らうことになる。さらに、イスラム社会でプライバシーはとても重要。収容者を衰弱させることによって、心理的に破壊することができれば、情報を取れるという仮定がある。だから、あの二人はプロセスのひとつと思って、ポーズしたのだろう。とても不可解なことだが。

夜間シフトは夕方7時から働き初めて、好きなことをやりまくる。いつでも下士官は馬鹿なことをするものだ。若者も馬鹿なことをするものだ。しかし、この事件の場合、彼らは馬鹿なことをしたわけではない。全体の責任を負う将校の指揮の失敗だった」

彼らがデジタル・カメラで現場写真を撮った理由は、この写真を家族や知り合いに見せるといって収容者を脅せば、情報を取ることができると考えたからであり、あるいは写真をネタに情報提供者になるよう圧力をかけるためのものだったという。それによって、結果的には虐待事件の見事な証拠を残してしまった。》

映画監督の森達也はコラム「メディア通信簿」（『週刊現代』04．5．29）で、《ブッシュやラムズフェルドが、いくら必死に限られた事例だと強調しても、組織ぐるみの犯罪行為であることは既に明白》であり、《拷問への指示や容認の雰囲気があったとしても、レンズに向かってポーズをとる兵士たちの意識が麻痺していたことは事実だろう。虐殺はこうして普通に始まる。人は後から悔やむばかりだ。その意味ではおぞましいニュースだが、9・11直後から昨年のイラク侵攻まで、まるで思考を停止したかのように翼賛報道を繰り返してきた米国メディアが、ここにきて少しずつ復元力を示し始めつつあることだけは微かな光明だ》と記しながら、日本のメディアが「拷問」ではなく「虐待」という言葉を用いていることへの疑問を呈している。

《無目的に軽度の身体的ストレスを与える行為だけなら、確かに「虐待」のほうがふさわ

しい。しかし情報収集を目的に身体的ダメージを与える行為は、正しい日本語としては「拷問」だ。何よりも、裸にして縛り上げ、軍用犬をけしかけるなどの行為は、どう考えても虐待のレベルじゃない。死者だって出ているのだ。アメリカの主要メディアの多くは、"torture"（拷問）と表記しているのに、なぜ日本のメディアは「虐待」（それもこれほど規律正しく）という用語に拘るのだろうか？》

もちろん、正しい日本語であるかどうかというレベルの問題ではない。世界の見方の問題であり、言葉一つに自分の全体重をこめるかどうかという問題なのだ。言葉に対して鈍感になり、好い加減になっていくことは自分が自分に対して鈍感になり、世界に対していい加減になっていくことである。鯛は頭から腐っていくが、人間は言葉から腐っていく。事態を「虐待」とみなしたとき、虐待されている人間を「虐待」の構図の中に放り込むことによって、すでに「虐待」を超える事態に荷担しているといつてよい。だから、森氏はどうしてもこう付け加えざるをえなくなる。

「3人の邦人が武装勢力に拘束されたとの一報があったとき、小泉首相や川口外相に他の閣僚たちも皆、口を揃えて「卑劣な」という形容詞を使い、新聞各紙の社説などにも、この形容詞が氾濫した。もちろんこの後に続く言葉は「テロ行為」で、文末の述語は判で押したように「屈さない」や「許さない」。

確かに勇ましくて景気はいいけれど、「卑劣な」という扇情的な言葉を使った瞬間に、洞察や葛藤が消え失せてしまう。政治家はバカなくせに狡^{ずるがしこ}賢いから仕方がない。でもその論調に、メディアがあっさりと迎合することが哀しい。その意味では、「テロ」という言葉のインフレも同様だ。

メディアにとっては生命線に等しい「言葉」が今、主体を失い、日を追うほどに刹那的に、しかも均質になっている。翼賛報道はこうして、いつのまにか普通に始まる。人は後から悔やむばかりだ。》

メディアにだけ限定できない。人は自分が使う言葉から疑っていかなければ、世界をどう疑っていくのだろうか。自分を疑っていくことは、自分の言葉を疑っていくことなのだ。さすがに評論家・作家のスーザン・ソントグも「他者の拷問への眼差し」（『論座』04・8）の冒頭で、《アメリカ合衆国が昨年イラクで先制攻撃をしかけて開始した腐敗した戦争。それについて、あらゆる場所にいる人々がいなく決定的な連想が、サダム・フセイン時代からの刑務所のなかでもっとも悪名高いアブグレイブ刑務所の収容者の拷問写真と結びついたものとなることは、いま想像にかたくない》として、《「虐待」か「拷問」か》を冒頭から問いかけている。

《ブッシュ政権とその擁護者たちは、この広報分野での大惨事——写真の拡散——を食い止めることに主力を注いできた。写真によってあばかれた指導層や政策がもたらした複雑な犯罪の実態に対処することよりも、である。まず第一に、現実を写真に転置するということが起こった。現政権の当初の反応は、大統領は写真に衝撃を受け、胸くその悪い思いをした、と語ることだった——あたかも、画像が物語っているのではなく、画像そのも

のに^{とが}咎あるいは恐ろしいものが宿っているといわんばかりに。それに、拷問という言葉回避してもいた。もしかしたら収容者たちが「虐待」の、続いて「辱め」の対象になっていた恐れがある——せいぜいそこまでしか認める余地はなかった。ドナルド・ラムズフェルド国防長官は記者会見で「私の印象では、今までのところの嫌疑は虐待であり、これは専門的に言って拷問とは異なる」「したがって、私は拷問という単語は使わない」と語った。》

この記述からすでに「虐待」という言葉を用いるか、それとも「拷問」という言葉を用いるか、によって大きな相違が生じていることがわかる。ブッシュもラムズフェルドも「拷問」という言葉を使いたがらず、せいぜい「虐待」という言葉で事態を遮ろうとした。なんのことはない、アメリカのメディアが「拷問」ではなく「虐待」という言葉を使用する文脈は、すでにブッシュ政権によってかたちづくられており、アメリカのメディアも、それに追従する日本のメディアも、「虐待」という言葉を使用することによって、拷問事件を惹き起こしているブッシュ政権に事態に批判的であるか否かを問わず、組み込まれてしまっているのだ。「アブグレイブの拷問」という記事で事件をスクープしたセイモア・ハーシュ記者ですら、記事の中で「虐待」という言葉を頻繁に繰り返しているし、そんな彼に独占インタビューを試みた青木富貴子の文章のタイトルも「捕虜虐待は米国の国家犯罪だ」であるから、いかに記事やレポートが先鋭的であろうとも、その根底の腐蝕が同時にさらけだされているといえよう。

もちろん、ブッシュ政権の意図がどうであろうとも、今回の事態は「拷問」よりも「虐待」という言葉のほうが適切である、という考えもあるだろう。したがって、その考えに立って自分たちは「虐待」という言葉を使用したのであり、ブッシュ政権の意向に乗せられているわけではない、という主張もありうる。ソントグはそのような反論や主張をたぶん念頭に置いて、次のように言葉を巡る闘いに続けて踏み入っている。

《言葉は対象に対して変化を起こし、何かを加え、何かを差し引く。10年前ルワンダで、居住地が隣接する^{ジェノサイド}フツ族によって80万人以上のツチ族が数週間のあいだに殺害されたとき、「大量虐殺」という言葉を回避すべくアメリカ政府は懸命の尽力をし、まさにそれによって、アメリカ政府には何の手を打つ意思もないことが示された。アブグレイブ——そしてイラクやアフガニスタンのほかの刑務所、さらにはグアンタナモ湾の「キャンプXレイ」——で起きたことを拷問と呼ぶのを拒むことは、ルワンダでの出来事を大量虐殺と呼ぶのを拒否するのにおとらず、言語道断の事態である。アメリカ合衆国も署名国になっている国際法や条約、協定において取り上げられている拷問の基準的な定義を記しておく。

「『拷問』とは、身体的なものであるか精神的なものであるかを問わず人に重い苦痛を故意に与える行為であって、本人若しくは第三者から情報若しくは自白を得ること……を目的とし……」（これは1984年の「拷問及び他の残虐な、非人道的な又は品位を傷つける取扱い又は刑罰に関する条約」にうたわれる定義で、ほぼ同様の文言がそれ以前の慣習法や条約にも盛り込まれている。その第一は1949年の4種の「ジュネーブ条約」に共

通している第三条であり、また、「市民的及び政治的権利に関する国際規約」「人権に関する欧州、アフリカ、南北アメリカ規約」などの、人権に関する最近の多くの規約である)。1984年の条約はとくにこう宣言している。「戦争状態、戦争の脅威、内政の不安定又は他の公の緊急事態であるかどうかにかかわらず、いかなる例外的な事態も拷問を正当化する根拠として援用することはできない」。そして、拷問に関するあらゆる規約では具体的に、監房や廊下に囚人を裸体で放置するなど、被害者を辱める意図のある取扱いも拷問の範疇に入っている。》

「拷問」に関する基準的な定義が明白であるにもかかわらず、「拷問」という言葉を回避して、「虐待」という言葉を使いたがるのは、なに^ニかを隠蔽したいからである。10年前のルワンダで起こった、フツ族によるツチ族の80万人以上の大量殺害が「大量虐殺」と呼ばれるのを回避したとき、そこでなにが隠蔽されたのかといえ、アメリカ政府がその大量殺害という事態に《何の手を打つ意思もないこと》が隠蔽されたのだ。では、アブグレイブ刑務所で起きたことが、「拷問」と呼ばれずに「虐待」と呼ばれることによってなにが隠蔽されたのかといえ、米軍による組織犯罪であり、ブッシュ政権のイラク侵攻における「正義と民主主義」そのものであった。「虐待」ということになれば、「虐待」に関与した者たちだけを罰すればコトは済み、組織犯罪ではなく個人犯罪として処理すればよかったからだ。現にイラク国内の刑務所を管轄する第800憲兵隊の女性司令官のカービンスキー准将と、その部下に当たる男女6名(後に7名)の憲兵だけに責任が押し付けられて、事件は米軍内部で処理されようとしていた。

この事件で謝罪したブッシュ大統領は盟友のアブドゥラ・ヨルダン国王に対して、「イラク人の囚人が受けた辱めと彼らの家族が受けた辱めを残念に思う」と神妙に述べながらも、「これらの写真を見た人たちが、米国の真の性格と心を理解してくれないことも残念だ」と付け加え、「あの監獄で起こったことは、私が知っているアメリカを代表していない」と語った。ここにブッシュ政権が事件を個人犯罪として処理することによって、なにを必死に隠蔽しようとしているかが逆にみえてくる。「米国の真の性格と心」であり、「アメリカを代表するもの」なのだ。つまり、サダム・フセイン政権を倒したアメリカの正義であり、自由であり、民主主義であり、それらのアメリカの良さすべてが拷問事件によって消え失せるとすれば、アメリカがいま血と汗を流してイラクで必死にやっていることは一体なんなのか、ということだ。拷問事件は実際、アメリカのすべての試みを一挙に突き崩そうとしている。

《アブグレイブなどの地の収容者の拷問の暴露がますます拡大し、損害が大きくなるのを食い止めるべく、現政権がどのような行動にでようと——裁判、軍法会議、不名誉除隊、上級軍人と責任ある閣僚の辞任、そして被害者への相当額の賠償——「拷問」という言葉は引き続いて禁句となるにちがいない。囚人の拷問をアメリカが認めたらどうなるか。アメリカの意図は徳にかなっている、アメリカの価値観は普遍的である、と信じさせようと現政権が行ってきたあらゆることと、拷問の事実は矛盾する。徳にかなったアメリカの意

図、アメリカの普遍的価値観——これこそアメリカにとって、自国の利益と安全を防衛すべく世界という舞台で繰り広げてきた一方的な行動の権利を正当化する、究極の、勝利主義的な根拠であるにもかかわらず。

世界各地でアメリカの信頼が傷つき、それが拡大深化するにつれて、大統領はついに「遺憾」という言葉を使わざるを得なくなった。そのときでさえ、なにが遺憾かと言えば、道義上の優越性という主張と、未開の中東へ「自由と民主主義」をもたらすという覇権主義的目標、この二つをめぐってアメリカは傷ついた、それが遺憾だ、としか聞こえなかった。たしかにブッシュ氏は5月6日ワシントンで、ヨルダンのアブドゥラ二世国王の脇に立ち、「イラクの囚人たちがこうむった恥辱にたいして遺憾」である、と言った。だが続けて、「これらの写真を見た人々が、アメリカの本性と心とを理解しなかったことも、それにおとらず遺憾だ」とも言った。》

ソントグが指摘する、大統領の口からその言葉しか洩れてこなかった「遺憾」は本当は、7人の憲兵たちの心ない恥ずべき行為によって、アメリカの威信が大きく傷つけられたことが遺憾である、といったものであったろう。彼ら7人の悪徳は彼ら自身のものであって、「アメリカの本性と心」は彼らに属していないというブッシュ政権の必死の主張は、いや、彼ら7人の行為こそがいまの「アメリカの本性と心」を体現しているという見方の打ち消しに向かっていたが、政権がアメリカの徳と価値観から切り離れたがっている7人のプロフィールが、『ニューズウィーク』（04. 5. 19）に掲載されている。

リンディー・イングランド上等兵（21）

虐待されるイラク人収容者を前に、屈託のない笑顔を浮かべる彼女の写真は、一連の事件の象徴となっている。昨年のイラク戦争時の「救出劇」で注目を集めたジェシカ・リンチ上等兵とは対照的だが、偶然にも同じウェストバージニア州の出身。事件が発覚するまでは、イングランドも故郷の田舎町フォートアッシュビーで、リンチと同じように町の誇りとされていた。／食料品店や養鶏場で働いていたイングランドは、大学への進学資金を稼ぐため予備役兵に志願。将来の夢は気象学者だったという。両親は取材攻勢から逃れるため身を隠しているが、記者会見には彼女の親友が出席し、イングランドはイラクで野良猫の面倒をみるような「思いやりのあふれる人」だと語った。／高校時代の恋人と結婚したが、2年で離婚。現在は妊娠4カ月で、相手は同じく虐待などの容疑告発されているチャールズ・グレーナー伍長だ。イングランドの弁護士も2人の関係を認めているが、恋愛という表現は避け、グレーナーが彼女の上官だったことを強調する。／イングランドの家族は、彼女はあくまで「命令に従っただけ。兵士ならそうすべきだろう」と主張している。

チャールズ・グレーナー伍長（35）

アブグレイブ刑務所は、恋愛の舞台には似つかわしくない。しかし、全裸で重ね合わせられたイラク人収容者たちの背後で、グレーナーとイングランドが腕を組んで、楽しそうに笑っている写真は大きな衝撃を呼んだ。／ふだんは、ペンシルベニア州でもとくに厳しいことで知られるウェインズバーグ刑務所の看守を務めるグレーナー。97年に妻と別

居し、後に離婚。11歳と13歳の子供がいる。／グレーナーの弁護士は先週、本人の「精神状態は良好」と語った。同時に、彼は情報将校や尋問を請け負う民間企業の「命令に従った」だけだと主張。グレーナーも「まちがったことはしていないと確信している」という。

サブリーナ・ハーマン技術兵（26）

バージニア州のピザ店でマネジャーとして働いていたハーマン。予備役兵に志願したのは、父や兄弟のように警官になるための訓練になると考えたからだ。しかし訓練が終わると、すぐにイラクへ派遣された。彼女の母親は、娘がスケープゴートにされるのではないかと心配している。／ハーマンには、全裸で虐待されているイラク人拘束者の写真を撮影した容疑と、顔を布で覆われた拘束者の指やつま先、性器に電極をつけ、眠ったら電流を流すと脅した容疑がかけられている。彼女はワシントン・ポスト紙の取材に対し、「供述を引き出すために（刑務所を）地獄にすること」が任務だったと、電子メールで答えた。

ジャバル・デービス軍曹（26）

ニュージャージー州の出身。海軍で働く妻との間に、4歳の息子と10歳の娘がいる。高校時代は陸上のスター選手で、モーガン州立大学へ進学後も競技を続けた。／一連の虐待事件については捜査官に対して、「イラク人拘束者が受けていたさまざまな扱いについては、道徳的な疑問を持ったが、（軍の情報部には）異なるルールがあると言われた」と答えている。／デービスの家族は彼の無実を主張。公表された写真にも、デービスは写っていないと強調している。

ジェレミー・シビッツ技術兵（24）

父親の話では、トラック修理の技術を学んだものの、実際にはもっぱらマクドナルドで働いていたという。／ボルティモア・サン紙によれば、職業軍人であるシビッツの父親は、同僚の兵士を密告するなど息子に助言した。その教えを守った息子は、「僕が何か話したら、どうなったと思う？」と母親に訴えた。話しても話さなくても、息子は窮地に立たされていただろう、と母親は言う。

バン・フレデリック三等曹長（37）

7人のなかでは階級が最も高い。バージニア州で妻とともに刑務所の看守を務めていた。尋問中に疲れ果てて死んだイラク人の遺体が氷詰めになれ、緊急治療を装って運び出すために偽りの点滴を刺されていた光景を、家族にあてた手紙に書いた。／刑務所の状況に対する懸念を軍の上官に伝えたが、返事は「心配することはない」だったという。

以上の6名以外に、**メーガン・アンブル技術兵（29）**が訴追されているが、彼についてはバージニア州在住がわかっているだけで、詳細は不明である。因みに、アブグレイブ刑務所の拷問について軍の犯罪調書部門に匿名の手紙を出し、証拠となるデジタル写真を収録したCDも提出して内部告発した**ジョゼフ・ダービー技術兵**のプロフィールは、こう記されている。

《内部告発を行ったダービーだが、英雄になりたがるタイプでもなければ、英雄になりそ

うな男でもなかった。ペンシルベニア州の田舎町で生まれ育った自動車工のダービーは、生い立ちも第372憲兵中隊の同僚と大して変わらない。彼が内部告発をしたと知ったある友人は、「ジョーらしくないな」と思ったという。だが、拘束されたイラク人のおぞましい写真を見て、ダービーは動揺し、陸軍の捜査官に匿名の手紙を出した。ダービーの家族は、彼が「内部告発者」と呼ばれることを案じている。「悪意のある人は、(彼の告発が)アメリカの恥をさらしたと思うかもしれない」からだ。》

このジョセフ・ダービー技術兵について、先の青木富貴子は《故郷の街で非難の対象になっているというニュース》に触れており、《同じ第372憲兵中隊の同僚を告発したことは愛国的でないと考える体質が片田舎の街にはまだまだ強いのだろう。しかし、ジョセフ・ダービーの告発がなかったら、何も始まらず、虐待は未だに続いていたに違いない》と述べている。外岡秀俊の先のコラムによれば、《5月8日付英紙ガーディアンは、米英の元特殊部隊員が民間警備会社に雇用され、イラクで一般兵士に「R2 I」と呼ばれる技術を教えた疑いが濃いことを報じた。同紙によると、最近イラクから英国に帰った元英軍特殊部隊員は、「刑務所の看守がR2 Iを使っていたのは明らかだ。だが看守たちは、自分が何をしているのか理解していない》と語ったという。》「R2 I」とは「尋問に対する抵抗(Resistance to Interrogation)」の略称で、「R2 I」が今回暴露されたさまざまな手法で収容者に対して、尋問への抵抗を失わせるために用いられたのではないか、という疑惑を見据えて、外岡氏はこういう。

《この報道が正しければ、虐待写真を別の角度から見ることできるだろう。私たちは、21歳の女性兵士リンディー・イングランド上等兵が、袋を被せられ全裸にされたイラク人の男性の股間を、笑顔で指さしている写真を前にしている。ある人は、アメリカ人の野蠻で残酷な心性を論じるだろう。戦時下の異常心理という普遍的な事実を読み取る人もいるだろう。あるいは戦争が誘発した彼女個人の性的倒錯を嘆く人もいるかもしれない。

だが、別の解釈はこうだ。彼女はまったく訓練も受けないまま、「R2 I」の任務を与えられた。情報機関が、戦争に必要な情報を入手しやすくするためだ。彼女は、国のために任務を遂行しており、心理的に何のためらいもない。あるいは笑顔で写真を撮ることそのものが、イラク人を辱め、貶めて抵抗を奪う尋問過程の一環ですらあるのかもしれない。イングランド上等兵は、捕虜救出劇で有名になったジェシカ・リンチ上等兵と同じく、米ウェストバージニア州の田舎町出身だった。このため多くの英紙は、二人の写真を掲げて報じ、「ジェシカはアメリカの勝利を助け、リンディーはアメリカが平和を失うのを助けた」(タイムズ紙)と論じた。だがリンチ上等兵がペンタゴンの情報操作で英雄に持ち上げられたように、イングランド上等兵も、その情報操作で葬られる運命にあるのかもしれない。》

内部告発者のダービー技術兵を含む彼らのプロフィールから感じられるのは、彼らが下層階級に属しており、予備役兵に志願した動機は大学への進学資金稼ぎであったり、就職活動であったりすることだ。下層階級は戦場に送るための兵士の供給源となっており、そ

のためにもアメリカでは下層階級の維持が不可欠とされている。いまのアメリカ社会は中南米と同様に、スーパーリッチと下層階級で成り立っており、競争相手のソ連消滅後、下層庶民の幸せが棚上げされた資本主義の最悪の状態に陥っている。上層階級の税金はカットされ、中産階級以下の人が払った税金のほとんどが軍需産業に流れ、上層階級に潜り込めなくなった中産階級は下層階級へと叩き落とされて、中産階級は滅びつつあるのが現状だ。

イラク戦争はアメリカの下層階級出身の兵士とイラクの人々との戦闘の光景を呈しており、いわば貧困層と貧困層が砲弾を撃ち合い、命を奪い合っている悲劇をそこに覗き込む必要があるだろう。訴追された7人に殊更彼ら自身の心性に帰せられねばならない野蛮さや残酷さを懸命に見出すよりも、彼らの野蛮さや残酷さは彼らが放り込まれていた戦場の中の刑務所という、野蛮さや残酷さが露骨に剥き出されている場所と一体のものであったと受けとめられる。イングランド上等兵が拷問現場で見せていた満面笑みの表情は、イラク人収容者を自分たちが思い通りに（することを許されている）いたぶることのできる満足感に裏打ちされている。おそらく彼女のこれまでの生涯でそれほどなかったであろう満足感であり、幸せ一杯の笑顔であったと推測される。人は恍惚の表情で人を殺すことができるし、人を拷問にかけることもできる。それは彼が異常であるからではなく、そのような異常な状況下に置かれているということであり、そのとき殺されたり、拷問される人々は彼と同じ人間とみなされているわけではないことだけははっきりしている。

アブグレイブ刑務所拷問事件に少なくとも衝撃を受けたナイーブな人々は、二カ月後にはマスコミが報じてきたほどには、大統領選挙戦の焦点とはなっていないし、それに大きな影響を与えているわけではないというアメリカの空気をどう受けとめるのだろう。朝日新聞コラムニストの船橋洋一は『週刊朝日』の連載コラム（04. 6. 18）で、米国内で他方で拷問事件に対する反感が強いことを伝えている。

《ジェームズ・インホーフ上院議員（共和党、オクラホマ州）は、「連中は、交通違反で捕まったわけじゃない。連中はテロリストだということを忘れてはならない……虐待事件に対する怒りに怒りを覚える」と気炎を上げている。

トレント・ロット上院議員（共和党、ミシシッピ州）は「犬を使って囚人を脅したというが、犬が彼らを食ってしまったわけじゃない」と、尋問テクニック擁護論に回っている。》

船橋氏はそれらの声に対して、問題は《米国が法（国際法を含む）をどこまで守る国なのか、米国ははたして法治国家なのか、さらには文明国なのか、という国家と文明の質が問われている》ところにある、と釘を刺す。上層階級に属する共和党議員の中からこんな声が飛び出し、拷問事件がそれほど真摯に受けとめられているとは言い難いアメリカの淀んだ社会の下層で、イングランド上等兵らはおそらく社会的な不公平感とやりばのない鬱屈感を託ってきたと想像され、戦場や刑務所はそれらのマイナス感情を一挙にプラス感情へと逆転させることのできる、束の間の楽園であったのかもしれない。

2004年9月14日記

